

創業時から顧客第一主義を貫き、 グループ売上高1000億円達成

佐川印刷会長 木下 宗昭氏

本誌 佐川印刷は全国に二五の営業拠点と六つの生産工場を持ち、商業印刷全般を手がけていますね。

木下 当社はカタログやパンフレット、チラシなどのカラー印刷物からビジネスフォームや各種帳票に至るまで、あらゆるジャンルの印刷物を作っており、なかでも部数やページ数の多い大規模な通販カタログや製品カタログに強みを持っています。とくに、創業二五周年プロジェクトとして一九九六年に建設した滋賀県日野町の日野工場は、当初グラビア印刷機二台からのスタートでしたが、その後四万坪の敷地に、製本工場やオフリン工場などを順次併設し、今では四台のグラビア印刷機、一三台のオフセット輪転印刷機を持ち、一貫生産によって納期短縮やコスト削減を図っています。なかでも関西で唯一の出版グラビア印刷機は、国内最大幅である二・四五メートルの用紙を使用でき、高い生産性と優れた色再現性を誇っています。また、二〇〇四年に関東の生産拠点として本格稼働した厚木工場も、オフセット輪転印刷機とオフセット印刷機をそれぞれ五台有し、印刷から製本までの一貫生産を行っています。

二〇一一年に時刻表のJTB印刷をグループ化

本誌 エスピータックやエスピーメディアテック、ジャパンニューペーパーなどの関連会社もあります。

木下 一九九一年に設立したエスピータックは、当社が培ってきた印刷にかかわる豊富な知識と技術をベースに、シールやタックラベルの原紙から加工品、さらに物流用の袋まで製造しています。また、一九九四年設立のエスピーメディアテックは顧客企業のシステム開発やWEB制作から個別印字のためのデータ加工まで、さまざまなシステム構築やデータ処理を主な業務としており、同じく一九九四年に設立したジャパンニューペーパーはお客さまのニーズに適した用紙を日本国内や海外から調達しています。このほか、ベネッセ様からの様ざまなご要望に対応する専門部隊のビーヴィオコーポレー



京都府向日市の本社ビル

ションもあります。

本誌 JTB印刷とJTB紙商事も佐川印刷グループに加わりましたね。

木下 当社は二〇一一年三月に旅行業大手のJTB様からJTB印刷の株式八五%を取得してグループ会社にさせていただきました。JTB様様では旅行業に特化するため、子会社のJTB印刷を専門の印刷会社に



任せたいとの意向があり、当社はこれを受けて検討した結果、関東地区での営業拡大に相乗効果が見込めると判断し、同社にグループに入っていたいただきました。JTB印刷は埼玉県に越谷工場と松伏工場の二つの生産拠点を有しており、従業員は約二四〇名で、時刻表や旅行図書、旅行パンフレットなど旅行関連の印刷物を主軸に二〇一一年度は約五〇億円を売上げています。今後は、それぞれのノウハウを活かした営業展開を行い、旅行業以外の販売先を拡大し



JTB印刷の松伏工場

木下宗昭（きのした・むねあき）氏
1943年生まれ。1962年・大谷高校卒業後、山一証券入社。1965年・ロクマ入社、印刷業の世界へ。1970年・独立し、キノシタ印刷を創業。1976年・キノシタ印刷を株式会社とし、佐川印刷に社名変更、代表取締役社長に就任。1991年・エスピータックを設立。1993年・佐川オフリン印刷(現ジャパンニューペーパー)、エスピーメディアテックを設立。2006年・佐川印刷代表取締役会長に就任。2007年・京都清宗根付館を開館、館長に就任。

ていきます。また、昨年四月にはJTB印刷の用紙を調達しているJTB紙商事もグループ化しました。
本誌 グループ全体の売上高は一〇〇〇億円を突破しましたが。
木下 二〇一二年度の当社単体売上高は六九〇億八五〇〇万円で、五年前の二〇〇八年度に比べ一三〇%増になっています。また、同年度の当社グループの合算売上高はJTB印刷の買収などもあって、一〇三六億一五〇〇万円と五年前に比べ二〇〇億円以上増加し、かねてから念願で

あった年間売上高一〇〇〇億円を達成しました。二〇一二年四月に営業畑で当社を牽引してきた江口宏副社長を新社長とする新体制が発足しましたので、これまで以上の攻めの姿勢で新規開拓を行い、売上げ、利益の拡大を目指していきます。
佐川急便・故佐川清会長との出会いから大きく成長
本誌 佐川急便の故佐川清会長との出会いが会社発展の大きなステップでした。
木下 私は高校卒業後、証券会社で営業を行っていましたが、実体の掴みづらい証券というものを顧客に勧めることに多少の抵抗がありました。石の上にも三年と思ひ、三年間頑張ってみました。やはり実際に「ものづくり」を行う企業での営業をしたいと印刷業界に飛び込み、六年間の修業の後に独立して一九七〇年十二月にキノシタ印刷を京都府向日市に創業したのです。当初は設備を持たないブローカーとして自転車一台で毎日お客様を訪問し、必死に仕事を集めました。最初の活版印刷機を導入してからは、夜遅く帰ってから自分で印刷機を回したりしたも

のです。

そんな時に当時の佐川急便の佐川清会長に出会ったのです。佐川急便様には同社がまだ全国展開される前から訪問し、三年間通い続けたものの受注には至りませんでした。ある日、佐川清会長の名刺に誤植が発生したことから、急遽作り直されることになりましたが、その際に佐川会長から「いつも通っている元気のよい若者に任せてみる」、つまり私に注文しろと発注担当者に指示を出され、初めて受注しました。私は佐川会長の名刺ということもあり、特急で納めるべきと判断し、すぐに外注先に出向いて、その場での印刷を依頼しました。一枚ずつ刷り上がった名刺を乾燥させながら全数刷り上がるまで待機し、すべて揃った段階ですぐに発注担当者に届けたところ、九州に出張される佐川会長の出立間に合わせる事ができました。そんな対応を会長に入っていたとき、取引が徐々に拡大していったのです。そして、同社の仕事を全国各地でも受注できるようになったことから、佐川会長に佐川印刷という社名を使わせていただくことを承していたとき、一九七六年に社名変更

を行いました。この後、当社の真摯な営業姿勢と佐川急便様をはじめとするお客様にも恵まれたことで、おかげ様で年々発展を続け、印刷業界で一〇指に入る企業にまで成長させていたできました。

顧客の喜びこそがものづくりの原点

本紙 創業時から顧客第一主義を貫いているのですね。

木下 印刷業は製造業ですが、お客様からの要望に合わせてオーダーメイドの商品を作っています。そのため、常にお客様のことを第一に考え、何を求めておられるのかを良く理解したうえで、お客様とともに一つの作品を作り上げていくことが大切となるわけです。印刷は複雑で難しいものですが、難しい分野だからこそ、挑戦のしがいがあり、お客様に喜んでいただいたり、感謝されたりした時の喜びは何物にも代えがたく、この喜びこそが「ものづくりの原点」だと思っています。印刷の設備や規模は大きく変化しましたが、「ものづくりの原点」はいつも同じで、お客様に良い企画を提案し、高品質な製品をスピーディーに作り

上げ、お客様から満足をいただくことです。

これが当社の創業時からのポリシーで、毎月の朝礼などで全社員が唱和している一〇項目の総則でも、最初に「私達の生活は、常に、お客様に支えられている」という感謝の気持ちをお忘れず、信頼される製品づくりをめざせ」と記しています。

スポーツ活動にも積極的な力を注ぐ

本誌 サッカーや野球などスポーツ活動にも力を入れていますか。

木下 もともと私はスポーツが好きで、ゴルフや野球はもちろんのこと、スキューバダイビングやスキー、自転車など、さまざまなスポーツを楽しんでおり、当社もサッカーや野球などスポーツ活動をサポートしています。とくに、古くから活動している軟式野球部はA、B、Cの三チームがあり、Aチームは京都府代表として全国大会への出場経験も豊富で、二〇〇五年の第六〇回岡山



京都軟式野球連盟会長として学童野球大会の式典などに出席

国体で準優勝し、二〇一〇年の第六五回千葉国体では優勝しています。また、サッカー部もA、Bの二チームがあり、Aチームの佐川印刷SCは二〇〇二年に念願のアマチュア最高峰であるJFLに昇格し、二〇一二年は年間を通じて七位でした。さらに、佐川印刷SCは同年の第六七回ぎふ清流国体で四回目の国体優勝を果たしました。

本誌 スポーツを通じて社会貢献にも努めているのですか。

木下 私はスポーツ好きですが、なかでも軟式野球が好きで、今でも練習試合に登板しています。軟式野球は青少年の健全な育成に極めて有効であるうえ、年齢を重ねても楽し



京都清宗根付館(上)とI階展示室

むことができるスポーツです。このため、当社は軟式野球を通じての地域社会貢献活動を行っており、私も京都軟式野球連盟会長や京都府体育協会副会長などを務めさせていただいています。

本誌 日本の伝統工芸でもある根付の収集や根付作家の育成も行っていますね。

木下 日本の良き伝統芸術を、日本人の手によって、日本に保管したい、との思いから、京都・二条城近くの壬生に江戸時代から現代までの根付、約二〇〇点を集めた日本で

初めての根付専門美術館、京都清宗根付館を二〇〇七年にオープンし、年四回の期間限定で公開しています。この美術館の建物は江戸後期の文政三年（一八二〇年）に建てられた京都市の有形文化財に指定されている武家屋敷、旧神先家住宅を当時の風格をそのままに改装したもので、古典根付の作家たちが優れた作品を創作した黄金期の雰囲気味わいながら作品を鑑賞することができます。また、美術館の斜め前には新撰組ゆかりの地として知られる壬生寺、すぐ近くには新撰組が屯所としていた

八木邸などもあります。

日野工場に製本第二工場を建設

本紙 主力の日野工場に製本の第二工場を建設しましたが。

木下 日野工場の一貫生産ライン

を増強するため、二つ目の製本工場を建設しました。既に建屋は完成し、二〇一三年三月には稼働する予定です。また、厚木工場でも印刷棟を拡充しており、オフセット輪転印刷機二機を増強する計画です。印刷業界は厳しい経営環境にありますが、やはり「攻撃は最大の防御なり」で、先を見通した設備増強が必要です。品質を高め、より早く、より低コストで生産を行い、お客様に満足していただくためにも設備の増強や更新は不可欠です。インターネットなどさまざまな電子メディアの普



滋賀県日野町の日野工場

及により印刷の市場規模は年々縮小していますが、決してなくなりはありません。時代を見据えながら、創業以来培ってきた「ものづくり」のノウハウを活かして誠実にお客様に向かい、新しいフィールドにも挑戦していきたいと思っています。